

子どもの本のひみつ

(題字・イラスト 陣崎草子)

2019年9月21日、新潟県糸魚川市のひすい王国館にて糸魚川児童文学セミナーが開催され、その中のトークイベントとして「子どもの本のひみつ⑥」も。トークゲストは、ともに卓球シリーズで人気の作家、吉野万理子さんと横沢彰さん。横沢さんのふるさと糸魚川で、卓球談義から…! (まとめ 奥山恵)



吉野 万理子さん

言わせて!



横沢 彰さん

部員集めに苦勞していた自分の中・高卓球部経験から、**卓球の魅力伝える物語をいつか書きたいと思っていた。**時代は変わり、最近は強豪卓球部やクラブチームでの取材の機会にも恵まれて…。

(自作の「チームふたり」から始まる卓球「チーム」シリーズについて)

どちらかといえばそれまで思春期の悩みを書いた作品が多かったが、**自分が悩み、荒れていた中学時代、卓球の仲間に救われた。**そんな部活、チームの経験を、ユーモアも交えて書いてみたかった。**個人スポーツと言われるが、卓球は団体戦だ!**

(自作の「男子卓球部」シリーズについて)

小学校時代反抗的だった自分も含め、子どもに向けて、**大人の言うことに少し耳を傾けてみるといいかもよ、**というメッセージをこめて書きました。

(卓球「チーム」シリーズについて)

「めざせ甲子園!」も「めざせ体育館!」も、**目標として優劣はない。**

(「男子卓球部」シリーズについて。)

何かを選ぶために何かをあきらめるでなく、**野球も田んぼもどっちもあきらめないというところが、スポーツものとしてとても斬新。**

(「横沢さんの「スウィング」について)

卓球をやっているひとりひとりのバックボーンをきっちり書いている。家族や生活すべてとのかかわりの中でやっている卓球に深みがあって、おもしろかった。

(吉野さんの「チーム」シリーズについて)

部長は、会議での表の顔と、部内での裏の顔を抱えている。**人って、見えている顔がすべてじゃない。**

(自作の「部長会議はしまります」について)

ふるさとの稲作地域の**「結」というつながりと、野球部の仲間のつながり**を重ねて書いてみたかった。

(自作の「スウィング」について)

一般書と児童書のボーダーラインに自分はいる気がする。区別はあいまい。書きたいことを書くという、ゆるやかな気持ちになっている。

(児童文学を書くという意識について)

部活のように目的を持った仲間だけでなく、**ただ気の合う仲間というのも書いてみたい。**社会の中には、どっちもあるので。

(これから書いてみたいテーマ)

吉野 万理子 (よしの まりこ)

神奈川県出身。新聞社、出版社勤務などを経て、2002年『葬式新聞』で『日本テレビシナリオ登龍門2002』優秀賞を受賞。2005年『秋の大三角』で第1回新潮エンターテインメント新人賞を受賞。小説、シナリオのほか、『チームふたり』に始まる卓球『チーム』シリーズ(全6巻)や『いい人ランキング』『部長会議はじまります』など児童書も多数執筆。

『チームふたり』

(宮尾和孝・絵 学習研究社)

卓球部キャプテンの大地は、小学生最後の大会でベスト8入りをねらっていた。そのために実力ナンバー2、六年生の組との最強ペアを望んでいたが、顧問の指示で五年生の純と組むことになってしまった。さらに家庭でも問題がおこって卓球どころではなくなった大地。さあ、いったいどうする？



『部長会議はじまります』

(イシヤマアズサ・絵 朝日学生新聞社)

詠学学園中学校では、部活の代表が集まって毎週“部長会議”を行っている。ある日、文化祭のために作った美術部のジオラマが壊されるという事件がおきた。「ジオラマ事件」の真相を探るために、文化部部長が集まる臨時部長会議が開かれ、犯人捜しに乗りだすのだが……。



(作家・作品案内 池田ゆみる)

横沢 彰 (よこさわ あきら)

新潟県出身。『まなざし』で日本児童文学者協会新人賞受賞。『ふあいと!卓球部』に始まる『卓球部』シリーズ(現在8巻刊行)や『ナイスキャッチ!』の『野球部』シリーズなど、部活や学校生活に関わる作品を多数執筆。日本児童文学者協会会員。全国児童文学同人誌連絡会『季節風』同人。

『ふあいと!卓球部』

(小松良佳・絵 新日本出版社)

中学一年生の拓が入部したのは、総勢5人の弱小卓球部。練習場所は体育館のわきの倉庫。県大会出場常連の女子卓球部との試合に勝たなければ、体育館で練習させてもらえない。「めざせ、体育館!」。ところが倉庫は不良生徒のたまり場で、まともに練習することもできない。どうなる男子卓球部？



『スウィング!』

(五十嵐大介・絵 童心社)

中学三年生の直は、好きな野球を続けながら、去年の冬に亡くなった父に代わって田んぼを耕す決意をする。兼三さんに耕作の仕方を教わり、部活の仲間に支えられてなんとか田植えまでこぎつけるが……。



まなざしで行ってみよう!

糸魚川を旅した人々

寄稿 小川英子(作家・糸魚川出身)

糸魚川は「北国街道」と「塩の道」の交わる交通の要所であった。

雪の中、60kgの荷を背負い、険しい山々が続く塩の道を運ぶ歩荷。彼らの世直し一揆——赤裏騒動を描く『荷揚げ』は岡崎ひでたか氏の名作。また、塩の道には恐ろしい山姥の昔話が残し、『うしかたやまんば』『うしかた山んば』などの絵本になっている。しかし、上野の伝説にある山姥は妖怪ではなく、村人に恵みを与える神であった。私の『山ばあはと影オオカミ』は、山ばあはにその山姥の面影を重ねている。世阿弥は糸魚川に来たことはないが、信州の善光寺に参詣する遊女が上路で山姥に出会う謡曲「山姥」を残している。

奥の細道を旅した芭蕉は、早川の急流を徒歩で渡るさいに転び、濡らした衣を河原で干したと、曾良は『随行日記』に書き記している。日向ぼっこをしている師弟の憮然とした表情が眼に浮かぶ。「つゝ家に遊女もねたり萩と月」の句を詠んだという市振の宿、桔梗屋の跡には碑が建っている。

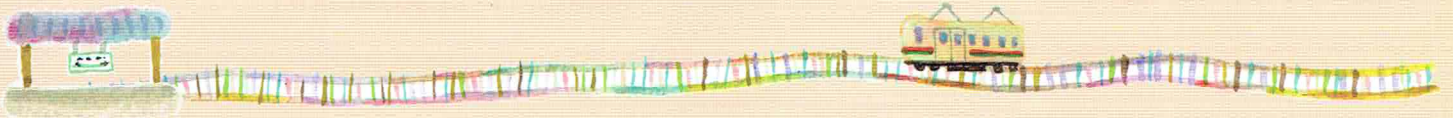
正確な日本地図を作った伊能忠敬は、糸魚川も測量しているが、岡崎氏は「天と地を測った男 伊能忠敬」で、藩の役人とのもめ事を忠敬の人生の転機として描いている。

幕末の名僧良寛は糸魚川で病床に伏し、蕭々と降る雨に心境を託した漢詩を詠んでいる。相馬御風の筆で曹洞宗の名刹直指院にその石碑がある。東京で活躍していた御風は、島村抱月、松井須磨子たちと芸術座を立ち上げるが、三十代で突然『還元録』を書いて、故郷糸魚川に隠棲している。

じつは御風は、翡翠再発見の功労者だ。縄文人が交易していた翡翠は、奈良時代以降は使われなくなり、国内に産地があることは忘れられていた。昭和になり、奴奈川姫の伝承に着目した御風が翡翠を探すことを勧めたことから、原産地再発見につながった。「万葉翡翠」求めて得まじ玉かも」は、この翡翠にまつわる松本清張氏の短編「ミステリ」。岡田依世子氏の『夏休みに、翡翠をさがした』は、小学生三人の翡翠探しの冒険を描く。翡翠の加工工房のある長者ヶ原遺跡は、北陸最大級の集落跡で、国の史跡。願いを叶える青い玉をめぐる古代ファンタジー『風の森のユエ』の舞台だ。著者の吉橋通夫氏は信州在住。

糸魚川出身の岡沢ゆみ氏の『バイバイ11歳の旅立ち』は、小学六年生四人が東京へ擬似家出する話。私の『ピアノ』も、ピアノを背負って猫がトキーノへ家出するファンジー。旅の歩歩は、ここではないとどこかに行きたいあこがれのなるだろうか……

児文協研究部「連続トークイベント 子どもの本のひみつ」今後の予定



第8回 愛知県

トークゲスト 村上しいこ × いたうみく 司会 林美千代

日時 2020年3月28日(土) 14:00 ~ 16:00 (受付13時半~)

場所 名古屋市公会堂 第2集会室 (TEL:052-731-7191)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞一丁目1番3号

地下鉄鶴舞線「鶴舞駅」下車4番出口 徒歩2分

JR中央線「鶴舞駅」下車 徒歩2分

共催 日本児童文学者協会 研究部 / 中部児童文学会

●どなたでも参加できます! ぜひどうぞ。

詳細は、日本児童文学者協会HPにて

<http://jibunkyo.main.jp/>

発行

日本児童文学者協会 研究部

2020年1月